福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

# 学習の転換と教師教育の新たな枠組みつくり



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2012-05-10<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 寺岡, 英男<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/10098/5417 |

# I

# 学習の転換と教師教育の新たな枠組みづくり

寺岡　英男

## 1　今年の夏、福井でのゼミから

この夏、福井大学大学院教育学研究科夜間主・学校改革実践研究コースでは３サイクル（１サイクル二日間）の集中ゼミを行った。参加者は、このコースの現職教員の院生（附属および公私立の幼小中高の教員、医療技術短大の教員）、ストレートマスターで附属学校でインターンシップをしている院生、そしてこのコースの大学教員４人である。

毎夏行っているゼミ。サイクル１は「実践の軌跡を読み取る」。実践記録・実践研究の現段階を探るということで、一日目は、手元にある全国の主に小中学校の紀要の中から１人が３つほど実践記録を選ぶ。さらにこちらが用意した実践の展開過程を跡付け、省察を主たる目的とする実践記録（伊那小、堀川小、福井大学教育地域科学部附属中など）の中からもう１つを選ぶ。そしてそれら記録の様式の比較を行う。二日目は、４―５人のグループに分れそれを紹介しあう。そこで、研究テーマの内容、研究を進めるアプローチの仕方やフレイムの設定の仕方、そしてそれが実践の中でどう展開されているのかを、あとづけられた実践の文脈を読み解きながら探っていく。二日目の後半は、グループの中のメンバーそれぞれが取り組んだ春からの実践と研究の展開を報告し、聞き合う時間に充てる。３サイクルの中ではサイクルごとにこの時間枠が設けられ、どこかで全員が報告する。

数日後のサイクル２では、二日間かけて各人が、実践の理論と方法・フレイムの問題を考える上で参考となるいくつかの文献の中から１つを読む。二日目後半にはその読みをグ

ループの中で紹介しあう。今回取り上げた文献は、デューイ『学校と社会・子どもとカリキュラム』、ショーン『The Reflective Practitioner』、バーニー・グレイザー他『死のアウェアネス理論と看護』、E・ウェンガー他『コミュニティ・オブ・プラクティス』。

最後のサイクル３では、二年目の院生は、サイクル１，２での検討をふまえ、このゼミで報告した自分の実践と研究の構造と展開の構成を探りながら、自分の実践記録をまとめ直す。一年目の院生は、サイクル１，２で担当したもののうちから、突っ込んで見てみたいものを１つ取り上げ、まとめてみる。二日目にはグループの編成を変えたところで、各人の報告と交流を行う。これをもとに各人は８月末までに、最終報告を提出する。

## ２　「口では言えん」教師のいとなみを探る

附属小の教員でこのコース一年目のＦさんは、サイクル１に関連した報告書をまとめた。選択した学校の紀要３つと堀川小学校の２００４年度の紀要とを比較しているのだが、その際探究のスタイルと論述のスタイルとの関連を比較の視点として取り上げている。

「探究のスタイルに合った論述のスタイルで記すということは、単に『中身に合わせて容器を選ぶ』ということだけにとどまらず、その論者のつまり探究者の探究の仕方にまで影響を与える。論述のスタイルは、時に探究の質や幅を規定し、狭めることになり、また時に、探究を推し進める原動力にもなる。論述スタイルは『容器』というより、『考えるための道具』に近い」、と。

そのＦさんは、比較分析を行う際、次のようなこだわりを持って臨んでいた。

「私は最近、小学校の教員として歩んできた私の身につけてきたことというか財産を、どういう言葉で表せばよいのだろうと折に触れ思っていた。小学校の教員として子どもの前に在ることの難しさ。一人ひとりの子どもや、その子どもたちの集まった子ども集団と向き合い、これがいちばんこの子たちにぴったりという立ち位置や物腰、態度、言葉を瞬間瞬間に選び取りながら、自分を存在させている、この微妙な匙加減さ。…若い頃お世話になった小学校の校長先生は、毎日悩んでいる私に『それは、口では言えんことやけど、何かあるんや』とおっしゃっていて、…この文章（「報告書」―引用者）は、堀川がどんなふうにして、『口では言えん』ことを言葉にしようとしているのかを探るための試みなのだった。」

Ｆさんは四つの紀要の比較分析を進める。３つの学校の場合、両方のスタイルに齟齬があるか、論述のスタイルに探究のスタイルが狭く規定されたり、縛られていると分析する。堀川の紀要については、①論述のスタイルが探究のスタイルをも規定し、決定づけている、②論述スタイルが、単なる表現技法ではなく、自分たちの生き方を示している、③「知」の生み出し方、共有の仕方、発信の仕方について示している、とまとめている。そして、その「知」について、「それは、つながり合いによって生み出されていく知であり、人々の息づかいの中でこそ躍動する知なのだと思う。そして、従来の論述のスタイルの枠の中では、それは『口では言えん』ものなのだと思う」と書いている。

コースの夏のゼミでは、３サイクルの多様で重層的な展開の中で、実践を書くことの意味を探っていった。それは、実践の構造と叙述の構造との関係を捉えることを通して、それらの分析の構造を探る、そのことによって自らの実践の構造と具体的な展開を探り、再構成していくサイクルを認識する、実践者集団で言葉を分かち合うことにより実践を共有化していく、そして実践者自身が書きとどめる行為の中で、Ｆさんの言葉を借りれば、探究のスタイルを、生き方を、「知」の生み出し方・共有の仕方・発信の仕方、つまりは新しいシステムを創っていく、というようなことをめざすいとなみであった。同時にそれは、そのいとなみを通して、自らの教師としてのアイデンティティを確認していくことでもある。

### ３　学習の転換と教師の役割のとらえなおし

今日の教育改革・学校改革の世界的な動きでは、伝達と獲得の学習の様式から，探究と協働の学習の様式への転換が、改革の軸に据えられている。その背景には、いまの時代が、「歴史の『峠』」（神野直彦）にさしかかり、これまでの重化学工業中心の社会から知識基盤型社会へ転換してきていることが挙げられる。そこでは、これまでのともすれば閉鎖的で知識の伝達を中心にした学校やそこでの学習の転換が求められている。

学習・発達理論の分野では、１９８０年代から９０年代に学習・発達理論の転換の動きが起こっていった。行動科学の理論にもとづく学習や授業研究への批判とデューイやヴィゴツキーなどの学習理論の再評価がなされた。新しい学習理論の潮流の中で、Ｊ・ブルーナーは、たえず省察を働かせ続けている存在として、その象徴と言えるだろう。かつて６０年代を特徴付けた教育内容の現代化の中、『教育の過程』の著者として、その理論的な支柱の役割を果たしたことは言うまでもない。それについて彼自身こう振り返っている。「私はそこであまりにも『知る』という単純な精神内部の過程と、それがいかに適切な教育学によって助長されるものなのかということに心を奪われてきたかのように思う。…子どもたちは概して文化上の害悪や難問に煩わされることなく、ある種の教育的真空状態の中に住んで当然とされていたのである」と。その上でブルーナーは、教育システムとは、文化の中で成長する子どもたちが、その文化の中にアイデンティティを見出すのを助けるものでなければならない、と文化主義の立場を明瞭にしていく。人がアイデンティティを構築し、おのれの文化の中に居場所を見出すことは、ナラティブの様式においてのみ可能なのであると述べ、学校での教授と学習における四つの重要なアイディアとして、行動主体・反省・協働・文化に注目し、学習共同体をつくりあげていくことの意味を展開している。

それをもう少しシャープな形で示したのが、９０年代に入ってのレイブ、ウェンガーの『状況に埋め込まれた学習』の提起だった。彼らの「正統的周辺参加」概念は、実践のコミュニティへの参加と熟練の発達として学習を捉える視点を提起した。それは学習を個人主義的な獲得の内化として捉える従来の説明の変更を求める。周辺性とは、コミュニティにおける学習のことの始まりを意味し、周辺的参加に次第にのめり込んで理解していく共

同体のもつ多様な関係の中で源泉に対しアクセスを増やしていく、そこにみられる変わり続ける参加と位置の見方こそが、学習者の軌道（trajectories）であり、発達するアイデンティティであり、成員性の形態である、という。同時に実践のコミュニティの再生産と変容についても言及し、実践のコミュニティとしての学校改革を現実の課題として位置づけている。ＰＩＳＡ調査の目的の中でのキー概念、「成人後の生活に市民として社会的・民主的に十分参加できる」ことには、レイブらの視点が反映されていると言ってよい。

それでは学習の転換でこれから求められるべきはどのような力なのか？　ＰＩＳＡ調査では形成されるべきリテラシー概念が提起されている。シュライヒャーはそのリテラシーを、「世界への扉」と表現し、情報、問題を解決する能力、他者との協働の能力、そして学習方略のリテラシーについて挙げている。私たちも２１世紀の社会で求められる力として、課題探究力・コミュニケーションカ・協働活動をマネジメントする力を据えている。

こうした力は、従来の知識の伝達型の学習では培うことが難しい。探究し表現し協働するプロジェクトを展開し、ネットワークを活かす新しい学習が求められる。新しい学習は新しい教員を必要とする。それは、「知識を蓄え伝達する役割を超え、子どもたちの協働探究プロジェクトを活性化し組織するファシリテーター・コーディネーターとしての実践力・組織力」をもつ教員だと思われる。

## ４　教師教育の新しい枠組みの構築

私たちは、新しい教師教育のデザインと組織の実現を図るために、新しいモデル－学び続ける教員を支援する〈学校拠点―ネットワーク〉モデルーを提案している。このモデルの柱は，①学校を拠点に、新しい授業づくりのために、教員と研究者とが協働して実践と研究を進める。②実践と研究の分裂を克服し、実践―分析―再構成のサイクルによる実践と研究の融合と持続的発展をめざす。③学校を超えた実践交流ネットワークを組織化する、というものである。そこでは、教師の同僚性が重視され、学校における教師集団が、大学や行政とも協力しながら、改革のための協働の実践を展開していくことが中心となり、起点となる。改革の取り組みは、省察的実践の積み重ねを通して行われる。それは同時に精緻な事例研究の蓄積であり、恒常的な力量形成のプロセスそのものである。そして、そうした実践と省察・事例研究をより広いネットワークを通して交流し、蓄積して、水準を高めていく。学校拠点の授業開発の積み重ねを通して教員の実践力形成を目指す大学院と学校の協働による新しい実践的教員養成の枠組みの提案である。

私たちのモデルは、これまでのいくつかの実践や理論を拠り所にしている。それは例えば、伊那小や堀川小などの息の長い協働的な探究学習の実践と記録であり、ショーンの「省察的実践者」としての専門性の提起であり、アメリカで１９８０年代後半以降展開されている拠点学校（Professional Development School「教職専門開発校」）での、学校における教師と大学スタッフとの共同研究と実践を通しての教師の実践的力量形成を実現していく取り組みであり、さらには私たち自身が取り組んできた附属学校との協働の実践である。

このモデルの実現をめざして２００１年度には現職教員対象の大学院、夜間主・学校改革実践研究コースを立ち上げた。そこでは、大学と共同研究の協力を結んだ学校から複数の教員が院生として大学院に入ってくる。その院生をコアに、学校の授業やカリキュラム改革の共同の実践研究が行われる。このコースの紹介は他の資料を見ていただくとして、冒頭紹介した夏のゼミに少し立ち返ってみる。

この夏のゼミは、このコースの年間サイクルの中で１つの重要な環をなしている。学校の研究紀要や実践記録は、指導案を実践記録に書き替えて、生徒の感想を付けて考察するものや、学校全体の研究主題と仮説設定にあわせた検証をめざすような「科学的」「操作的」なデータ処理のようなものが多い。ひとたび作成された後はほとんど読まない、読まれない。実践を省察し、次の実践を再構成していくというサイクルになってはいない。こうした記録の書き方は、知識を覚えさせる授業、指導案どおりに進められる授業、あるいは実践に先立って予め立てられたカリキュラムの枠組みに沿った実践の展開では間に合ってきた。しかし、子どもの協働的な探究学習をつくっていくためには、実践し、記録し、省察し、再構成する新しい実践のサイクル、新しい協働の仕組みを求める。実践の記録の様式を探ることは、その中で重要な環に位置づいている。

## ５　まとめ

いま教師をとりまく状況は、本特集のテーマである「教師受難の時代」という表現が端的に示している。それは以前からの国の教育政策の持つ構造的な問題であると同時に、「歴史の『峠』」にさしかかって、基本的な選択の道として新自由主義的な方向をとってきていることで、一層増幅されていると言える。しかし、「教師受難の時代」の責任の一端は、教員養成に関わる大学の側にもあることも逃れようのない事実である。２１世紀のこれからの社会に求められる力、それを支える教師の専門的な力量の見直しにあわせて、教師教育の新しい仕組みをつくっていくことが求められる。そして、こうした取り組みのなかでしか、いまの状況では、教師が「口では言えん」ことをねばり強く探り、自らのアイデンティティを確立していくことはできないのではないかと思われる。そのための場と仕方の形成という協働のいとなみに大学も参加していかなければならない。

参考文献

神野直彦「日本の目指す『ほどよい政府』への道」『生活経済政策』No. 108、2006年１月号
Ｊ・ブルーナー『教育という文化』岩波書店，2004年
ジーン・レイブ、エティエンヌ・ウェンガー『状況に埋め込まれた学習』産業図書1993年
国立教育政策所監訳『ＰＩＳＡ2003調査評価の枠組み』ぎょうせい、2004年
アンドレア・シュライヒャー「OECD加盟国の生徒の学習到達度」東大第１回COＥ公開研究会記録、2003年
福井大学教育地域科学部　文部科学省「特色ある教員養成プログラム」申請文，2004年

福井大学教育地域科学部附属中学校『中学校を創る』東洋館出版，2004年
牧田秀昭「授業研究と実践記録を中心とした校内研修の変革」柳沢昌一「実践し省察するコミュニティとしての学校」『生活教育』2006年５月号所収。
寺岡英男「大学・教育学部改革の試みと課題」東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター編『教師教育改革のゆくえ』創風社，2006年

（本稿は教育科学研究会『教育』2007年1月号「特集・教師受難の時代に教師として生きる」に所収のもの）